

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

第7号

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

# な し む し

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

SUMMER

2000



発行〇平成12年7月31日  
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会  
〒850-8570 長崎市江戸町2-13  
(長崎県原爆被爆者対策課内)  
Tel. 095-823-4278  
Fax. 095-820-3037

Publication  
and Enlightenment Project  
for Hibakushas' Medical Care

PUBLICATION AND ENLIGHTENMENT PROJECT  
FOR HIBAKUSHAS' MEDICAL CARE

## NASHIM普及啓発事業

INFORMATION NASHIM講演会

DOCTOR'S REPORT

東海村臨界事故における被曝医療救護班体験記

動き出したセミパラチンスクへのヒバクシャ医療協力

放射能Q&A

長崎大学原研国際ホームページに送られた質問より

REPORT

第41回 原子爆弾後障害研究会



# NASHIM普及啓発事業

**NASHIMでは放射線ヒバクシヤ医療に関する  
国際協力推進の意義と必要性を啓発するため、  
講演会の開催や各種のPR活動および  
情報提供などをおこなっています。**



NASHIMでは、平成7年度に被爆50周年記念事業として「医療と健康」をテーマとした講演会と「ヒバクシヤ医療と医学」長崎からの提言」と題してシンポジウムを開催しました。このシンポジウムの内容は英語版で出版されています。また、平成9年度にも、秋田ヘラルドシヤ友好協会との共同で「チェルノブイリ支援を考える」のテーマのもとに秋田市で講演会を開催しました。そのほか、当協力会の事業を紹介するパネルを長崎大学医学部原研公開セミナーや長崎原爆写真展示会場などの諸会場を活用して毎年展示を行い、NASHIMのPRに努めています。

また、平成9年春には、写真家山端庸介氏の長崎原爆写真展の開催、平成11年夏には2カ月に渡り原爆資料館にて「セミパラチンスク写真展」ソ連の核実験場・被曝の大地」を開催しました。これは旧ソ連邦の核実験場として500回にも及ぶ核実験が繰り返されたカザフスタン共和国・セミパラチンスクの被ばくの実相を伝えるもので、大きな反響を呼びました。この他にNASHIM事業のPRとして、英文和文でのパンフレットを作成し、国内外で活用すると同時に、インターネットホームページも英語・日本語で開設しています。NASHIM発足当初から平成10年までの活動を綴った「なむ7か年の歩み」も作成していますので、ご希望の方がいらっしゃいましたら、NASHIM事務局までご連絡下さい。この機関誌「なむ」も毎年2回発行し、今回で第7号を数えます。毎号特集を組み、多くの方々に協力をいただきながら活動を報告してきました。ご意見等ございましたら、事務局までお寄せ下さい。

今年の普及啓発事業としては、下記の日程で講演会を開催します。「放射線被ばく」についてわかりやすく説明し、みんなで考える会にしたいと思います。多くの方の参加をお待ちしています。



## NASHIM 講演会



NASHIMではこの夏、講演会を開催します。昨年9月に起こった東海村臨界事故で、実際に3名の被曝した方の治療に携われた先生の講演のほかに、身近な言葉でありながら以外と知らない「放射線」について、放射線の専門家がわかりやすく説明します。私たちの身の回りにも存在する「放射線」を、正しく理解し、正しく怖がってください。

### 「みんなで考えよう放射線被ばく～被爆地長崎から～」

- ☆プロローグ 「原爆放射線について」  
講師 関根 一郎 (長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設長)
  - ☆特別講演 「東海村でなにが起こったか～臨界事故に学ぶ～」  
講師 明石 真直 (放射線医学総合研究所放射線障害医療部第一研究室長)
  - ☆対 談 「放射線被ばくのはなし」  
講師 奥村 寛 (長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設教授)  
山下 俊一 (長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設教授)
- と き:平成12年8月6日(日) 10:00～12:00  
■と ころ:長崎原爆資料館ホール



## 東海村臨界事故における被曝医療救護班体験記

昨年9月30日に起きた東海村での臨界事故に際し、長崎県からの被曝医療救護班派遣の要請により日赤長崎原爆病院においても5人編成(医師1名、婦長1名、看護婦1名、放射線技師1名及び事務1名)の医療救護班を結成し、県内の他の医療機関からの派遣4チームと共に早速翌日には水戸市へ向かいました。事故現場で3人の重症被曝患者がたこと、10キロメートル以内の住民に対する屋内退避勧告が出されたことは報道で知っていましたが、その他に関しては時間的な余裕もなく、十分に状況を把握できぬまま現地へと赴きました。5班はそれぞれ割り振られた検診所へと赴きました。私どもの班は診断除染スタッフや自衛隊の除染車が待機する中、約2000名の周辺住民の検診(放射性物質の汚染検査と問診による汚染者の篩い分け)を行い、翌日は東海村内の石神コミニティーセンターでの検診に参加しました。前日の夕方には350メートル内の地区の避難要請が解除となっており、当日は多くの住民が受診しました。ここでは更に詳しい体表面放射能線量測定その他、全員に採血、検尿及び問診がなされました。後日、国の関係機関の報告では地域住民の中にも健康には影響のない程度の被曝をされた方々がいたことが判明しました。

今回の臨界事故では違法な裏マニュアルのずさんな作業が引き起こした、国内で初めての臨界事故とされ、さらに関係監督官庁の監督・指導の甘さも明らかになりました。最善の治療と闘病にも拘わらず、最終的には2名の従業員が亡くなられ、あらためて極めて深刻な放射線事故となりました。





# 動き出したセミパラチンスクへのヒバクシヤ医療協力



旧ソ連時代、カザフスタン共和国のセミパラチンスク核実験場では、1949年以降、地上、地下を合わせて500回近い核実験が行われています。すでにNASHIIMでは1992年以降、チェルノブイリ周辺3ヶ国（ベラルーシ、ロシア、ウクライナ）から毎年夏40日間の研修生受け入れを行ってきました。1995年の原爆50周年を期して、世界の被ばく地からの研修生招聘事業を拡大し、翌年からは毎年1名をカザフスタン共和国から招聘しています。これら交流の中で、特に長崎大学医学部の主導の中、セミパラチンスク被ばく者医療協力の具体的な準備が行われてきました。19

97年2月には、セミパラチンスク医科大学のライソフ学長が長崎を訪問し、翌年3月に両校は学術交流協定書に調印し姉妹校関係を確立しています。この間、NASHIIMでは中部カザフスタンの環境と健康問題を邦訳出版し、幅広くセミパラチンスクの核実験被害の一般啓蒙を行いました。この報告書を1950年代後半にまとめられた当時のカザフスタン科学アカデミーの調査団副団長で、現在もNGOの代表としてセミパラチンスクの被ばく者支援で活躍されているサイム・バルムハノフ博士は、第2回永井隆平和記念長崎賞を受賞されています。また1999年夏には約2ヶ月にわたり長崎市原爆資料館でのセミパラチンスク写真展示会を行い、広く現地の被ばく者状況の紹介に努めてきました。このような長崎からの取り組みに対して、日本政府も本格的な平和外交さらにシルクロード外交の一環として、昨年9月国連との共同でセミパラチンスク核実験被ばく者への幅広い支援国会議



を主催し、大きな成果を挙げました。唯一の被爆国である非核先進国の責務として、世界の平和外交に貢献する為に、外務省を中心とする日本政府は当時の高村外務大臣、武見政務次官の主導で以下の項目での積極的なセミパラチンスク支援に向けた具体策を提言しました。それはまず第一に、被ばく者への具体的な医療支援です。これは長崎、広島での長年蓄積されてきた被ばく者医療面でのノウハウの技術移転で、長崎大学や広島大学を中心に、JICA（国際協力事業団）の技術協力の枠組みで本年6月末から準備が始まっています。これに関連して無償資金供与による医療機材の現地導入も、来年4月以降に予定されています。次いで現在では掌握困難な長期にわたる被ばく状況や、被ばく者の実態を明らかにする為に、患者登録や検診体制整備への協力が計画されています。さらにNASHIIMへの具体的な協力要請としては、被ばく者行政のノウハウの紹介や技術移転で、これは具体的な行政レベルでの研修生の受け入れなどが予定されていますが、いずれもNASHIIMで従来から行ってきた国際ヒバクシヤ医療協力の活動内容と合致し、今までの取り組みが期待されています。これら以外にも国連を通じて女性の地位向上のための貢献策なども日本の資金供与を中心展開される予定です。すでにカザフスタン共和国への日本政府の支援は、イルティシユ川に架かる平和大橋の建設事業や、新首都アスタナ建設計画

97年2月には、セミパラチンスク医科大学のライソフ学長が長崎を訪問し、翌年3月に両校は学術交流協定書に調印し姉妹校関係を確立しています。この間、NASHIIMでは中部カザフスタンの環境と健康問題を邦訳出版し、幅広くセミパラチンスクの核実験被害の一般啓蒙を行いました。この報告書を1950年代後半にまとめられた当時のカザフスタン科学アカデミーの調査団副団長で、現在もNGOの代表としてセミパラチンスクの被ばく者支援で活躍されているサイム・バルムハノフ博士は、第2回永井隆平和記念長崎賞を受賞されています。また1999年夏には約2ヶ月にわたり長崎市原爆資料館でのセミパラチンスク写真展示会を行い、広く現地の被ばく者状況の紹介に努めてきました。このような長崎からの取り組みに対して、日本政府も本格的な平和外交さらにシルクロード外交の一環として、昨年9月国連との共同でセミパラチンスク核実験被ばく者への幅広い支援国会議

を主催し、大きな成果を挙げました。唯一の被爆国である非核先進国の責務として、世界の平和外交に貢献する為に、外務省を中心とする日本政府は当時の高村外務大臣、武見政務次官の主導で以下の項目での積極的なセミパラチンスク支援に向けた具体策を提言しました。それはまず第一に、被ばく者への具体的な医療支援です。これは長崎、広島での長年蓄積されてきた被ばく者医療面でのノウハウの技術移転で、長崎大学や広島大学を中心に、JICA（国際協力事業団）の技術協力の枠組みで本年6月末から準備が始まっています。これに関連して無償資金供与による医療機材の現地導入も、来年4月以降に予定されています。次いで現在では掌握困難な長期にわたる被ばく状況や、被ばく者の実態を明らかにする為に、患者登録や検診体制整備への協力が計画されています。さらにNASHIIMへの具体的な協力要請としては、被ばく者行政のノウハウの紹介や技術移転で、これは具体的な行政レベルでの研修生の受け入れなどが予定されていますが、いずれもNASHIIMで従来から行ってきた国際ヒバクシヤ医療協力の活動内容と合致し、今までの取り組みが期待されています。これら以外にも国連を通じて女性の地位向上のための貢献策なども日本の資金供与を中心展開される予定です。すでにカザフスタン共和国への日本政府の支援は、イルティシユ川に架かる平和大橋の建設事業や、新首都アスタナ建設計画



小児白血病センター建造支援など、多くの案件が行われています。東にセミパラチンスク核実験被害、西にアラル海塩害問題など、広大な国土に諸種の環境汚染問題を内包するカザフスタンでは、旧ソ連からの独立後カスピ海での石油、天然ガス資源開発を中心に国の経済建て直しが計られています。しかし、セミパラチンスク核実験場周辺住民の健康問題や経済低迷問題は一国の能力を越えた大きな負の遺産として残されています。NASHIIMでは今までのチェルノブイリを中心とした医療協力に加え、さらにセミパラチンスクへの具体的な支援を国や関係各機関と協力して実践していく予定です。特にヒバクシヤ医療に関わる人材育成に対しては、この地でも積極的に参画していく予定です。



# 放射能 Q&A

長崎大学原研国際のホームページ

<http://www-sdc.med.nagasaki-u.ac.jp/inter/coverpage.html>に、

放射能Q&Aというコーナーを設けています。

このコーナーを御覧になられた全国の方々から週に2~3通の割合でお便りや御質問があります。今回は、その中の一つを紹介します。

## 質問

昨年の茨城での事故以来、放射線・放射能に関して少し関心を持つようになりました。実際に放射線をなんらかの事情で浴びてしまった場合、まず、どのような病院へ行ったらよろしいでしょうか。また、どのような検査をしてもらえばいいのでしょうか。各県にそのような事態になったときの救急病院の一覧というものが実際あるのでしょうか。(30代主婦)

## 解答

放射線の急性障害や被ばく後の健康影響について関心を持っている医療施設は、一般病院では非常に少ないのが現状です。

全国的に見た場合、原発設置県以外の2次病院ではわからない場合がありますが、その場合でもしかるべき施設に問い合わせで対処していただけたと思います。(長崎では長崎大学医学部附属病院)

もし、急がない場合や近くにない場合は、千葉県の稲毛にある放射線医学総合研究所(放医研)に相談することもできます。

被曝時の検査は、一般的なのがリンパ球数や染色体とされています。しかしある程度以上の被曝量でないと(リンパ球は500mSv、染色体も定量的には100mSvくらい)変化はでない、というのが一般的です。もし、被ばくをした可能性があれば、状況等を正確に思い出し、放医研に連絡すれば、線量測定、医療の領域の人も含めた対応ができると思います。

## Schedule

7月17日(月)~8月15日(火)

チェルノブイリ・カザフスタン研修生受入事業  
(笹川保健記念協力財団の窓口事業、  
日本ベラルーシ友好協会との共同事業を併催)

8月6日(日)10:00~12:00

NASHIM講演会

と ころ/長崎原爆資料館ホール  
(共催:原研公開セミナー)

お問い合わせ/NASHIM事務局  
(県原爆被爆者対策課内)  
TEL.095-823-4278  
FAX.095-820-3037

8月22日(火)~9月5日(火)

専門医師等派遣事業

(カザフスタン共和国セミパラチンスク)

## 編集後記

また、暑い夏が巡ってきました。今年は長崎原爆被爆から55周年。行政レベルでは、長崎市を中心に被爆地域拡大是正のための取り組みが活発に行われています。

NASHIMでは「みんなで考えよう放射線被ばく」をテーマに、今年も講演会を開催します。昨年9月、国内初の臨界事故が発生し、尊い命が失われました。犠牲になられた2名の方のご冥福をお祈りするとともに、この教訓を生かし長崎から何が出来るか考えていきたいと思ひます。

長崎が有する被爆者治療の実績と放射線障害に関する調査研究の成果を生かし、ヒバクシャ医療を通じて世界へ貢献する道をさらに目指していきたいと考えています。

REPORT

## 第41回 原子爆弾後障害研究会

平成12年6月4日、長崎原爆資料館にて第41回原子爆弾後障害研究会が開催されました。今年の研究会は、一般演題47題と特別講演およびシンポジウムという構成でした。特別講演は重松逸造・放射線影響研究所名誉顧問によるもので、「原爆後障害研究—その歩みと二十一世紀への教訓」と題してなされました。

被爆者研究は1950年の被爆者調査から始まり、12万人の集団を50年間追跡調査し、被曝線量別のがん死亡リスク、がん発生リスクが計算されました。この結果は放射線防護基準のデータとして利用されています。この他に遺伝的影響調査やがん発生メカニズムを調べるための分子生物学的アプローチなど多岐にわたって研究がなされてきました。重松先生は21世紀のヒバクシャ研究は「温故知新」ではなく「温故創新」という言葉が望ましいと提唱されました。つまり、古きをたずねて新しきを知るのではなく新しきを創りあげていくべきであるということです。

シンポジウムは昨年9月30日におきた臨界事故に関するもので「東海村臨界事故の放射線被曝に学ぶ」というテーマで6名のシンポジストによる講演が行われました。被曝線量の推定、高線量被ばく患者の治療、被曝住民の健康管理についての調査結果が報告されました。

一般演題ではWHO(世界保健機関)や、外務省、NASHIM、長崎大学が医療支援を行っているセミパラチンスクやチェルノブイリに関する報告もありました。さらに、長崎大学の医学部生によって、チェルノブイリ周辺における尿中ヨード量の検討が報告され、海外医療支援における若手の成長が実感されました。今後の原爆被爆者研究が世界のヒバクシャ医療に貢献できるよう、「温故創新」を胸に刻みつつ閉会となりました。

